

のである(第1図b)。

この標本はミツバモチノウオ *Cheilinus trilobatus* の前上顎骨で、同図aとは門歯や関節突起の発達程度、上向突起と前上顎枝の長さの比などが異なるとしても、上向突起と前上顎骨枝がつくる角度や前上顎骨枝の長さとの比などが前4種のどの標本よりも谷津台貝塚の資料に近い形態をもっている。ミツバモチノウオは、奄美以南、インド、南西太平洋に分布する暖海性の魚で、分類学的にはペラ科に属す。

谷津台貝塚の発掘を担当した相京邦彦さんと山口直樹さんの話によると、当センターが発掘をした貝塚部分は、二次堆積層で縄文時代前期の黒浜式土器と江戸時代の土製メンコや最近のガラス片が混在することであった。つまり、採集された魚骨資料の堆積年代については、決定的な決め手を欠いていることになる。したがって、もしこの資料が、現在の東京湾周辺には分布しない暖海性の海魚であれば、それなりに重要な意味をもつわけである。

日本沿岸にすむペラ科は現在約130種ほどが知られており、4つの亜科に分類されている。先きに比較を行なった4種のペラは、いずれもカンムリペラ亜科に属し、ミツバモチノウオはモチノウオ亜科に属す。つまり、タイ科でいえば、クロダイとマダイのちがいに相応するちがいがあるわけで、同じペラ科の前上顎骨でも上記の5種の間で既述のような形態差があっても少しもおかしくない。この点は、現生種をつかってもう少し検討する必

要があるが、もし、ペラ科の前上顎骨が亜科レベルで形態差を生じているとすれば、谷津台貝塚の資料は既述した①~④のような特徴にもとづいてペラ科に同定して差し支えがなく、岡村さんの指摘は正しいことになる。

現在の東京湾にもペラ科の魚類は分布しているが、分布の中心は、富津以南の湾口付近の海域で、湾奥部まで侵入するものは多くない。この傾向は縄文時代でも共通していたと考えられ、湾岸の貝塚からのペラ科の出土例は現在までのところ、金子浩昌さんが富津市富士見台貝塚と横浜市称名寺貝塚で同定したものが北限のはずである。谷津台貝塚は、これよりも北の東京湾奥に位置するが、この貝塚からはペラ科のみにとどまらず、ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*、イモガイの加工品、ウルメイワシ *Etrumeus teres* など、東京湾奥にはふだん生息しない外洋性の魚貝類が量的にはわずかではあるが同定されている。したがって、今回の資料は、二次資料とはいえ、これに代わる一次資料が得られるまで貴重な資料といえそうである。

文献

千葉県文化財センター 1983 『谷津台貝塚』 84 pp, 20pls

文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班 1983 古文化財に関する保存科学と人文・自然科学, 630pp

(2班:千原台事務所)

古墳時代竪穴住居の構造的変遷と居住空間

渡 辺 修 一

「竪穴住居址の発掘においても炉や柱穴と周辺の溝とを出せばそれで発掘終わりという傾向なきにしもあらずだと思うのです。」(田中義昭 註1)

市原市草刈遺跡E区で調査研究員小高春雄と筆者が行なった調査は、いみじくもこの言葉に対する一つの答えを出す結果になった。

1984年度調査した草刈E区は、広大な草刈遺跡のごく一部であるが、住居址約200軒、水田面に向

かって開く鬼高期の環溝などを検出して多くの知見を得た。住居址の調査に臨んで筆者らが最も力点を置いたのは徹底した床面の精査であったが、その成果は予想以上に大なるものがあつた。当然遺物等は全く未整理の状態にあるが、ここにその成果の重要性を考え若干の考察を加えて報告するものである。

※

1. 草刈遺跡E区における住居址の分類(第1図)

床面精査の成果の一つは入口位置の確定であった。入口位置を端的に示すものは、壁に向かって外傾する所謂「梯子ピット」(一本梯子の架設を想定せしめる)であるが、これは後述するように時期的に限られるようである。しかし梯子ピットには硬質・馬蹄形の土堤状盛り上がり(以下「土堤」とする)や硬質・ベッド状高床部(所謂ベッド状遺構が通常軟質である点相異がある)を伴うことが多い。そして梯子ピットが認められない住居でも同じ位置に直立乃至わずかに内傾するピットが検出され、それらの殆どがやはり土堤や硬質ベッド、あるいはそれに類する硬質床面を伴う。谷島一馬はこれらのピットを「ブリッチ・ピット」と呼び、「踏み跡」との相関関係からそれが入口の位置を示すものとしている(註2)。また高橋一夫も「5番目のピット」と馬蹄形盛り土、そして床面の硬度及び高度から入口を想定する(註3)。筆者もこの点全く異論はなく、草刈E区の調査を通してこの確信をますます深めた。そして入口位置の確定こそが住居の軸方向を決定する上での指標ともなるのであり、住居の類型化に欠くべからざる重要な要素なのである。以下この前提のもとに、便宜上カマド出現以前と以後に分けて分類を行なうが、ここではあくまで中規模以上のごく一般的な住居のみを扱うことにする。

カマド出現以前の住居は一般に火処として炉を有する。入口と炉の位置関係は基本的に不動であるから、それは分類の手段として有効でない。従って主に貯蔵穴位置や住居自体の平面形等に依って分類を行なう。

ERo…縦長、胴張気味の隅丸方形。中軸線上に入口、炉が相対する。貯蔵穴は入口右脇、多くは壁に接する。土堤や硬質ベッドは貯蔵穴を巡る例が多いが、梯子ピットを巡るものもある。

ERs…隅丸で正方形に近いもの。諸施設の位置関係はERoに準ずる。草刈遺跡では少数。

EO…縦長長方形。主柱穴配置も同様。入口と炉は相対するが、貯蔵穴が入口側のコーナーに寄り、入口も中軸線上よりも貯蔵穴寄り。

ES…ほぼ正方形。若干長方形気味でも主柱穴配置が正方形をとるものはこれに含める。入口と炉はやはり相対する。貯蔵穴はコーナーに

偏在し、入口位置も貯蔵穴寄りである。炉、貯蔵穴を複数持つ例が見られる。

ESi…ほぼ正方形。入口区画と思われるその内側に貯蔵穴を設け、入口ピットを持たない。草刈遺跡では稀。

なお、隅丸方形でない住居でも入口のすぐ脇に貯蔵穴を設ける稀少例もある。むしろ大型、超大型住居ではこの方が多い。EO b, ES bとする。

カマド出現以前の住居はほぼ以上の諸類型に集約されるが、若干規格性に欠け、中間的、例外的なものも存在する。それに対しカマド出現以後の住居はカマド、貯蔵穴配置によって明確に分類される。いずれもほぼ正方形である。

C…特定のコーナーに貯蔵穴を配し、その傍らに入口、カマドが位置する集中型。

C f…炉を有する。

C i…入口区画と思われるその内側に貯蔵穴を設ける。

C a…Ciの貯蔵穴部が張り出し施設となるもの。

F…入口の対辺にカマドを設ける。

F I…貯蔵穴を入口側コーナーに設ける。

F i…貯蔵穴を入口区画と思われるその内側に設ける。

F a…Fiの貯蔵穴部が張り出し施設となるもの。

F b…入口のすぐ脇に貯蔵穴を設ける。

F II…貯蔵穴をカマド側コーナーに設ける。

F III…カマドのすぐ脇に貯蔵穴を設ける。

本来、C系、F系諸類型にはE(Earlier Period)に対してL(Later Period)を付けるべきであるが、ここでは省略することにする。

なお、すべてに共通する点は入口が南を指向することであろう。結果的に同じであるものも多いが、炉やカマドが北を指向するのではない。また入口ピットであるが、ER~ES系、C系には外傾のピットが多いが、F系は直立のピットが殆どである。

2. 諸類型の時空的位置

さて上記の住居諸類型は時間軸上いかなる位置を占めるのか。まず草刈E区における豊富な重複関係から見通しを得てみたい。

カマド出現以前(五領・和泉期)の住居では次の関係がある。

ERo → EO, ERo → ES, EO → ES, ERs, ESi

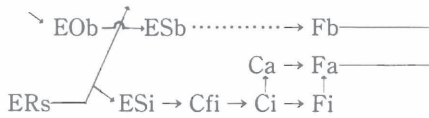
等は例が少ない為、有効な重複関係を持たない。調査時の観察で和泉期と判断されたものはES型である。

ここにERo → EO → ESの変遷は明らかである。これは極めて自然に首肯し得るものであろう。ERo型の基本構造は弥生時代の一般的な住居と全く同一である。五領期に入ってすみやかに変遷して古墳時代的な規格性のあるES型に至る。

カマド出現以後の住居では次の関係がある。

C系→F系。この重複例は数多い。逆は皆無である。従ってこの変遷は明確である。稀にC系同志の重複があり、093→102(第1図)の例はCf→Cである。F系同志の重複もあり、いずれもF I→F IIあるいはF IIIとなっている。108→104→097(図1)の例はC→F I→F IIIである。調査時の遺物観察では、C系は須恵器模倣坏の出現以前、日考研編年(註4)では鬼高I期にほぼ相当するが、より和泉的要素の強いものもある。千葉市以北よりカマド出現が若干遡る可能性もあろう。それに対しF系は、ほぼ須恵器模倣坏出現以後になり、F, F II, F IIIは鬼高期中葉以降の所産と見られる。F I, F IIは量的には少ないが、鬼高期でも比較的古相を示す土器群を出土する。これらをC系からF II, F IIIへの過渡的形態として理解してよからう。Fiの派生形態とも見られるFaは、Fbと共に大型住居に散見され、あまり時期を限定し得ない。以上を要するに次の如くである。主流は上段。

ERo → EO → ES → Cf → C → FI → FII → FIII



この草刈E区における図式は果して他遺跡においても普遍性を持ち得るのであろうか。特に規格性を持ったES系以後は重要である。次にそれを検討してみたい(第2図)。

一般に五領期後半から特に和泉期において正方形住居が主体を占めるようになるのは疑いないところであるが、残念なことにそれらの入口位置を想定し得る報告例はあまり多くはない。しかし少ない資料からも充分に類推は可能である。例えば船橋市外原遺跡(註5)は和泉期の集落として著名であるが、4号址で階段状施設(草刈E区でも3例調査した)が、10号址で硬質ベッドが検出さ

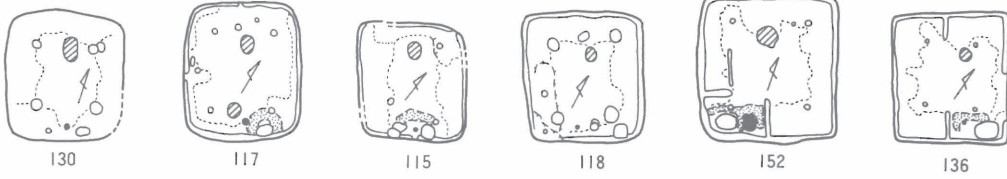
れている。両址では北辺寄りに炉が位置し、その対辺側コーナー貯蔵穴の脇に入口が設けられる典型的なES型である。千葉市大森第二遺跡では24, 32B, 38A号住など(いずれも和泉期)で入口ピットと思われるものが検出されており(註6)、また船橋市小室D217号址(註7)なども同様であって、これらもまたES型である。和泉期では中規模以上の住居は炉の偏在とその対辺側コーナーの貯蔵穴が一般的であり、ES型が主体を占めるのはほぼ間違いないであろう。一方、佐倉市岩富漆谷津遺跡(註8)などで炉の対辺中央に貯蔵穴を設ける(土埧や硬質ベッドを伴うことが多い)ESi型が少なからず認められる。これは遺跡によって出現頻度に差があるが、和泉期に定形化したものであろう。なお、和泉期の動向として一点加えておけば、炉と貯蔵穴の複数化がやや目立つことである。これについては後に触れる。

次にカマド出現期の住居であるが、草刈遺跡の近傍の例として市原市ナキノ台遺跡(註9)072A号址を挙げ得る。和泉期の特徴を残した土器群を出土したこの住居は炉が北辺寄りに位置し、その対辺の南東コーナー貯蔵穴の脇に入口を設け、その反対の脇(東壁)にカマドを構築するCf型である。改築(拡張)前の072B号址はES型であった。やや離れて市原市国分寺台遺跡群でもカマド出現期の住居が多く検出され、和泉期にカマドと炉の併存が認められる(註10)。写真からの判断であるが、御林跡遺跡10号住(註11)は典型的なC型住居である。また和泉期末の君津市戸崎城山遺跡2号住(註12)は、遺構の遺存状態が悪いこともあって入口位置が明らかではないが、カマド位置が東辺かつ貯蔵穴寄りであることからC型と判断される。目を転じて千葉市大道遺跡は鬼高期の最古相を示す土器群を出土する集落であり、入口位置が推定されるものが数例あって、C型にCi型が混在する(註13)。先述の大森第二遺跡ではES型に直続する数例が調査されている。入口位置は不明であるが、カマドが東辺に設けられ、南東コーナー貯蔵穴寄りに偏在しているからおそらくC型であろう。そして柏市根切遺跡1号住(註14)もまた鬼高期初頭のC型であった。以上のように千葉県内の和泉期末～鬼高期初頭の住居はC系が基本と見られる。しかし例外もある。

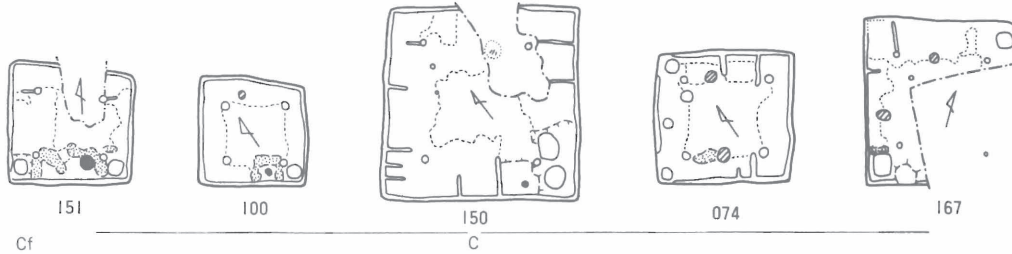
船橋市小室遺跡のカマド出現期の住居はD218,

ERo

EO

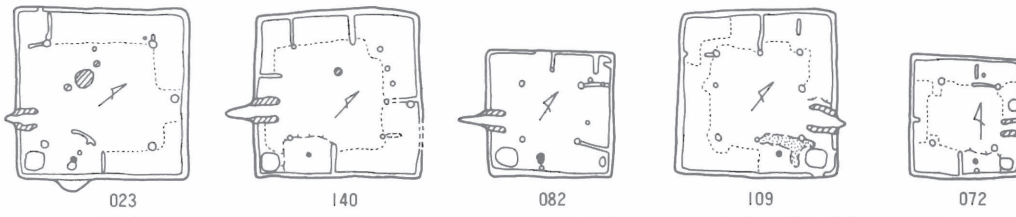


ES



Cf

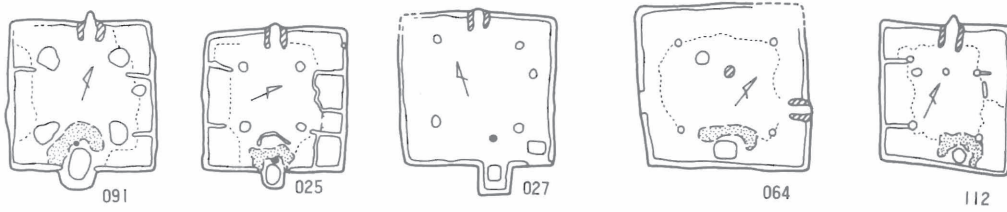
C



Fa

Cfi

Fi

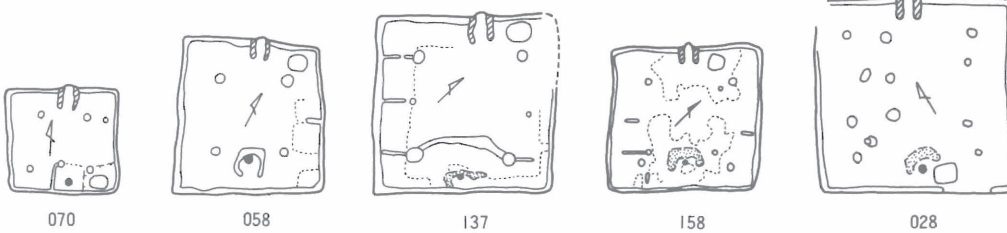


F I

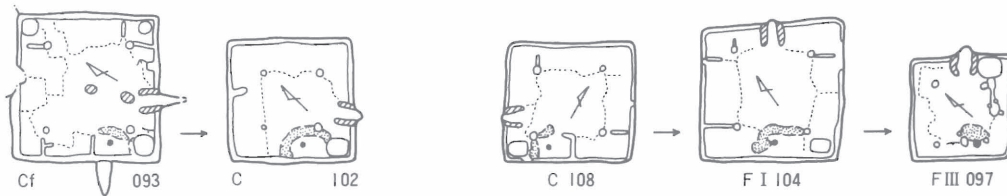
F II

F III

Fb



重複関係



第1図 草刈遺跡E区住居址諸類型(約1/300)

D310号址などがある。D310号址は中央に炉を有し、入口位置の確定はできないが、貯蔵穴位置から考えてF I (f)型と推定される。小室の場合、カマドを受容する際の何らかの主体的条件の故にES→F Iと変遷したのであろうか。時期的に遅れている訳ではないのである。F I型は一般に鬼高前期葉に位置するようであるが、一部でC系住居が主流の鬼高初期頭にも存在する(草刈E区070号址)から矛盾はない。F IIとF IIIは鬼高期の住居で最も多い形態であろう。区別が必ずしも明確でないものもあるが、日考研編年鬼高III期の佐倉市大篠塚27号住(註15)がF IIであり、鬼高IV期の市原市ナキノ台084号址、佐倉市新開3号住(註16)やVI期の佐倉市宮本8号住(註17)がF III型であるように、新しくなると貯蔵穴がカマドに接近する傾向にある。鬼高後半期は安定した形態としてのF II、F III型が、貯蔵穴を持たないFと共に主流をなしていくのである。なお張り出しを持つFa型は鬼高II期(ナキノ台073A号址など)からIV期(新開2号住など)までしばしば大型住居に採用される。Fb型も鬼高前半期に稀に大型住居に採用(ナキノ台078号址など)される。

ところで房総以外ではどうであろうか。カマドの出現が関東地方で最も早いとされる埼玉県児玉地方を例に見てみよう。

本庄市に所在する西富田遺跡群(註18)や諏訪遺跡(註19)、古川端遺跡(註20)などでは和泉後半期にはカマドが定着しているが、それらの住居形態には共通性が強い。即ち多くは東辺にカマドを設け、しかもそれが南東コーナー貯蔵穴寄りに偏在する。入口位置を確定する資料に乏しいが、例えば西富田新田2号住貯蔵穴西脇の小ピットを入口ピットとすることができればC型と言える。それ以前の住居の典型は例えば本庄市笠ヶ谷戸3号住(註21)で、入口位置を確定し得るES型の和泉期の住居である。鬼高期では、初頭の諏訪49号住などはC型らしいが、中葉には北壁中央寄りにカマドを設けるものが多いからF系が主流になると想定できる。

これまで見ただけでもカマド出現期住居の酷似性は驚く程であろう。他にも埼玉県南部では富士見市打越遺跡(註22)が鬼高初期頭のC型(Cfを含む)を主体とする集落であるし、和泉期のカマドとして知られる横浜市折本東原遺跡B-3、B-5

号住などは、横長長方形小型住居ながらC型の特徴を有する(註23)。さらに、宮城県亶理町宮前遺跡(註24)でも南小泉期(和泉併行期)のカマドを持つ住居が調査されているが、先行する42号住がC型と見られ、後出の25号住がF I型と見られる。宮前では塩釜期～栗田期の多数の住居が検出されている。入口位置が確定できないものも多く断言できないが、ER系→ES系→C系→F系の変遷は認めてよいと思われる。

以上述べたように、草刈E区で見られた住居諸類型の変遷が他の地域でも(実に南東北にまで)概ね認め得る可能性が強まった。尤も、住居の類型化は上記に尽されなないかも知れないし、より細密な年代的検討、またより多くの遺跡での検証も必要であろう。が、とまれ我々はここにばかり留まることはできない。広範囲における大体共通した住居構造の変化という現象の背景、即ちその主体的条件としての住居内における空間利用パターンの考察へ一歩を踏み出さねばならないのである。

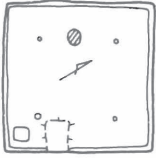
3. 居住空間

従来「間仕切り溝」(註25)を多く検出した報告例はあった。床の踏み締め範囲を記録した報告例もあった。しかしそれらを有機的に関連させて床面の使用状況やその区画を考えながら調査した例がかつてあったろうか。筆者自身、過去に調査した図面を見るにつけ赤面するばかりである。

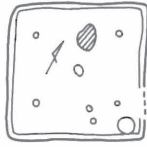
草刈E区で徹底した床面精査を行ない、床面硬度分布の観察と多数の間仕切り溝の検出によって得られた知見はまさにその間隙を埋めるものと信ずる。

五領期は古墳時代的住居の確立過程である。そしてそれは住居の方形化と貯蔵穴(註26)規模の拡大、そのコーナーへの配置である。弥生時代における住居内貯蔵穴の一般的成立は画期的な意味を持つが、概ね入口脇に設けられた小規模なものであった。これが古墳時代に入ると、貯蔵機能増大の要請から容積が増すと共にコーナー部の有効利用が図られたと考えられる。貯蔵空間の成立である。これと相前後して間仕切り溝が出現してくる。この頃の間仕切り溝は主として入口部や貯蔵空間を他から区画するように設けられる。床面は一般に柱間内と入口が硬く、柱間外は軟らかい。炉の背後も軟らかいが、その左右は硬質部分が柱

ES



外原4



大森第2 38A



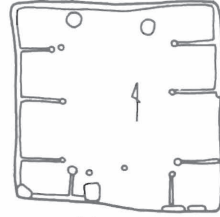
笠ヶ谷戸3

ESi



岩富漆谷津163

ESi or ESb ?

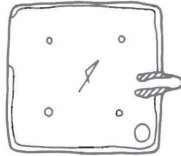


大篠塚44

C系



ナキノ台072A



大森第2 17B



大道005



大道002



上ノ台2P-49

C系



西富田新田2



諏訪49



打越11



打越12



宮前42

F I



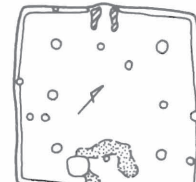
上ノ台2R-43



ナキノ台070

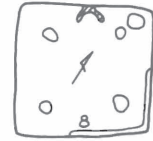


ナキノ台083



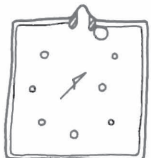
ナキノ台 073A

F II



大篠塚27

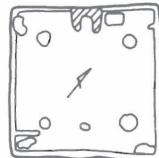
F III



ナキノ台084



新開3



宮本8



下田43



宮前14



カマド



炉



柱穴, 貯蔵穴, 等



周溝, 間仕切り溝, 等



土堤状施設



ベッド, 階段, 段

第2図 他遺跡の例 (約1/300)

間外へ延びることがある。また貯蔵穴周囲は一段下がりが軟質であることが多い。筆者は踏み締めの顕著な柱間内を居間空間、柱間外を寝間空間、炉の偏在する辺の一部を炊事空間と想定したいが、果して炊事空間が確立していたか否かは疑問が大いに残る。例として152号址を挙げた(第3図-1)。この住居は隅丸方形と見る人が多いと思われるが、コーナー形状の曖昧な判断よりもコーナー一部利用の有無を重視すべきと考えるためERo型とせずEO型とした。為念。

EO型から支柱穴配置が正方形となってES型が成立するが、次の和泉期には重大な変化が現われる。第一に貯蔵穴の複数化である。入口脇コーナーのものが最も主要な位置を占めるのであろうが、他のコーナーにも設ける例が出現する。多いものでは4ヶ所に設けるもの(外原10号址)までである。これは貯蔵・物置機能のさらなる増大が考えられるし、またとりもなおさず貯蔵穴を設けないコーナーでも物置空間として機能していたとも見られよう。プランを正方形化することによって獲得された有効面積の増加との相補的な関係が考えられる。またESi型の場合は入口部下に大規模な貯蔵穴を設けているが、これも床面有効利用の一つの進化であろう。

一方間仕切り溝も普及する。異なった機能空間を分割するだけでなく、寝間空間と考えられる柱間外をさらに分割するものも現われるようである。

第二のより重要な変化は炉の複数化が見られることである。五領期にも複数の炉が散見されるが、より多く出現するのは和泉期に入ってからである。それらは、従前の位置あるいはより壁に近づいたものと床面中央寄りに進出したものを持つ場合、そして従前の位置あるいはより中央寄りになったものと貯蔵穴や入口のある一面に接近するものを持つ場合がある。草刈E区167号址は後者であり、火床面に火熱の痕跡がより大きいものが貯蔵穴北脇に存在し、周辺は柱間外としては異例に踏み締めが著しい。炉の機能としては調理および採暖・照明が考えられる(註27)が、五領期以前はその両機能の妥協点に炉が位置していたと見られる。しかして和泉期に上記のような例が出現する。これは即ち炉の機能的拡散——炉の機能の一部が居間空間から分離される——、つまり炊事空間の確立と見る事が許されよう。カマドの出現はそれ

自身画期的なことであるが、その前段階に炊事空間の分離が一部で始まっていたのである。

かくてカマドが出現する。カマド出現当初の様相を集約的に表現しているのが草刈E区093号址である。これはCf型で、南コーナー貯蔵穴の東脇にカマドを、西脇に入口を設ける。当初南西辺にカマドが設置されていたが、何らかの理由で短時のうちに付け替えられたものと考えられる。南西辺から南東辺への付け替え例は他にもあり、風向き等の理由を想定し得る。貯蔵穴は計3ヶ所に見られる。北コーナー、東コーナーのそれは間仕切り溝で区画され、特に北コーナー貯蔵穴には通路とも思える硬質床面が延びている。炉址が床面中央とカマド前面の2ヶ所に見られ、床面中央のものは小規模で良好な火床面を遺存しない。カマドとその前面の炉を同時に使用していたとは考え難く、炉はカマド導入以前のものであろう。カマド導入以前に炊事空間が成立していた可能性を高める例であろう。また一般にCf型住居の炉は床面中央寄りに位置し、やや小規模なものであるが、これこそ調理機能を失った地床炉の最後の姿ではないだろうか。093号址の場合の空間分割は、小規模な炉を持つ中央部を居間空間、カマド側の辺をカマドに付帯する貯蔵機能を含めた炊事空間、北、東両コーナーを貯蔵・物置空間、他を寝間空間と想定したい(第3図-2)。

柿沼幹夫は和泉期から鬼高期初頭の児玉地方の住居形態(小稿のC型に相当)を、カマド・貯蔵穴と入口を直結させようとしたためとして、厨房=台所=勝手=土間の成立を説いている(註28)。また高橋一夫も千葉市上ノ台2P-49号住を例にとり、カマドの移設によって小稿で言うFIII型からC型(類似)への移行が柿沼仮説を立証するものであり、カマド出現の早い先進地域であった児玉地方では土間概念の発生も早く、他地方では鬼高期中葉に土間概念が導入されたとしている(註29)。しかしこれは事実と反する。上ノ台の例は他遺跡には見られない偶発性の強いものであり、カマド出現期の住居構造は広範囲で斉一性がある。また仮にカマド出現期に土間の成立を認めたとしても次段階のF系住居ではそれが崩れ去ってしまう。柿沼は入口、貯蔵穴、カマドの存在する一面を土間、他をすべて居間=寝間空間としているが、これも床面硬度等から推定される区画と矛盾する。

今日あるいは近年まで残存した未開社会の住居の間仕切りは、まず簡単なものでは居間空間と寝間空間が分割され、より複雑なものでは炊事空間や物置空間が独立するケースが多いようである(註30)。構造的にはそれぞれの社会、民族により違いが大きい(当然であるが)。しかし最も基本的な生活行動(睡眠・食事・休息・接客・性行動…)に関わる分割パターンは大同小異である。仮に土間空間がわが国に特有の空間分割であるとしても、古墳時代の竪穴住居でその確立を考えるには無理がありはしまいか。この問題に示唆を与える資料を次に検討する。

草刈E区158号址はF III型住居であり、古墳時代としては新しいタイプに属する。この住居では入口の対辺中央にカマドが位置し、右脇に貯蔵穴を配する。当然カマドの両脇は炊事空間であろう。南コーナーは特に区画され、ここを物置空間と考えることができる。鬼高期に入ると貯蔵穴は再び1ヶ所のものが殆どを占めるようになるが、貯蔵穴を設けないコーナーで、特に区画される、あるいは特徴的な床面硬度を示す箇所を持つ例が多く、物置空間としてのコーナー部の機能は依然続いていたと見られる。それから寝間空間、これは南コーナーを除く両サイドの軟質部分としよう。そして床面中央部分が他に類を見ない本址最大の特徴である(第3図-3)。

床面の中央部分は一般に最も踏み締めの顕著な部分である。まず例外は見られないと言ってよい。ところが本址では硬質部分の内側におよそ2×1.5mの範囲で軟質部分が分布しており、しかも周囲の硬質部分も両サイドにおいて途切れている。直接踏み締めを受けなかったこの部分は、敷床であったと見るのが最も妥当であろう。敷床が想定される例など例外中の例外であるが、床面中央部(柱間内)が居間空間として機能していたという強力な傍証となり得るのではないか。

カマド出現前後に一応完成したかに見えた住居内諸機能の分割は、しばらくして再編成を受けた。まずカマドが入口の対辺に移り、そしてやがて貯蔵穴もそれに追隨する。ここに、中央に居間、奥に炊事、両側に寝間、いくつかのコーナーに物置という安定した構造が完成した。一時的に炊事空間が入口脇に出現した一つの要因は、長い期間に亘って火処としての使命を果たしてきた炉の残映が

大きかったからでもあろう。

最後に興味深い例を引用しておく。

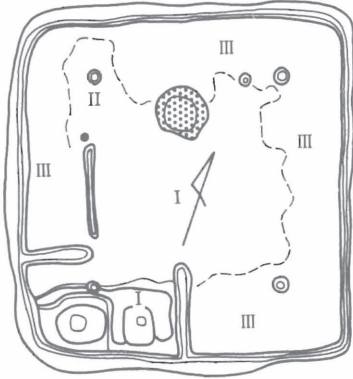
「……たとえば、樺太アイヌでは、入口から室内にはいると、中央に炉をはきんで左右の壁ぎわに寝床がある。右寝床(入口から見ると左側)は主人夫婦のものであり、左寝床(入口から見ると右側)はその他の家族の寝床であって、……炉のまわりの座席の割り当てと対応している。」(註31)

古墳時代の住居と樺太アイヌの住居を同列に論じることではできまいが、しかし居住空間の考察にはすぐれて示唆的な資料であろう。それぞれの時代、それぞれの集団の文化階梯に応じて機能的なかかる空間分割の原則が貫徹していたから故の住居構造の共通性であり、また変遷であったろう。

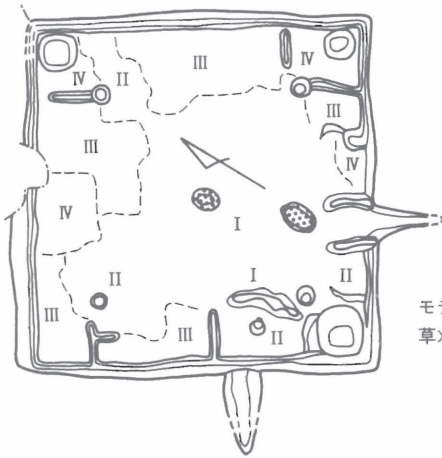
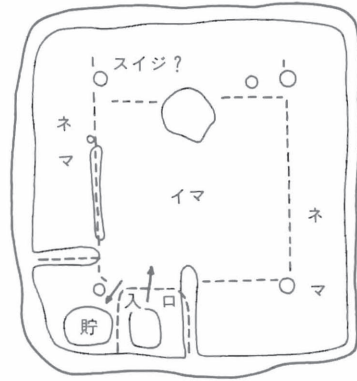
古墳時代は住居構造の変化という点で、実は激動の時代であった。依然として方形の竪穴内に留まっていたとは言え、住居内の空間分割は確実に進化した。五領期の住居と鬼高期の住居は、単に炉とカマドの違いではない。ただ炉とカマドが置き替っただけに見えて、鬼高期の住居はより質的に高次元な空間利用の産物であった。住居内の機能分割が一定の完成を見たと言っても過言ではなからう。そして次の大きな画期は、竪穴が悉く小規模化し、竪穴内に空間分割が見られなくなる、つまり住居空間の一部が(そしてやがて全部が)竪穴外へ脱出した時代まで待たねばならない(註32)。

※

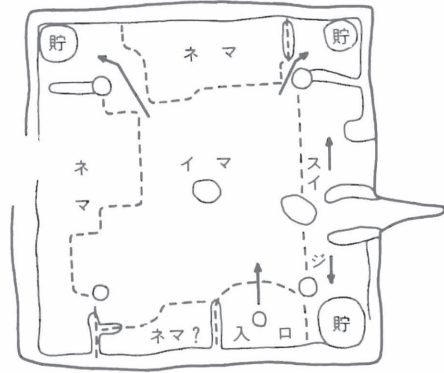
古墳時代の竪穴住居址は一見単純である。大体方形を呈し、炉かカマドがあり、大半は決まった位置に柱穴があり、そして貯蔵穴がある。その限りにおいてパターン化したものである。その一見パターン化した住居址がパターン化した調査姿勢を生み、そしてそのパターン化した調査によって我々は何と多くの情報を見逃してきたことか!開発を前提とした調査が殆どを占める今日、遺跡の死活は一に我々の手に委ねられている。ただ漠然と掘り進めば何か判る。それではいけない。我々は、調査の大規模化に反比例して失われてきた新鮮な問題意識をとり戻し、いかなる遺跡に対してもそれをぶつけてやらなければならない。何かがあるはずだ。我々が腹這いになって、土まみれになって問いかければ遺跡はきっと答えてくれる。



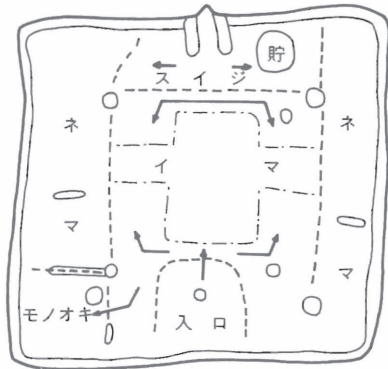
モデル1
草刈E区152号址
(E O型)



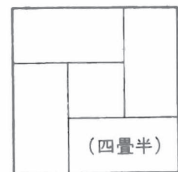
モデル2
草刈E区093号址
(Cf型)



モデル3
草刈E区158号址
(F III型)



床面硬度 I ~ IV
硬 ← 軟
(それぞれの住居址内での相対評価)



第3図 空間分割想定モデル (約1/120)

遺跡が断末魔の叫びをあげて滅びてゆくか、それとも静かに微笑んで往生するか……いずれにしても調査に要する時間はあまり変わらない。

註

- 1) 田中義昭「弥生時代集落研究の課題」質疑 『考古学研究』31-3 1984
- 2) 谷島一馬「竪穴住居址における踏み跡と入口の位置について」『千草山遺跡発掘調査報告書』千草山遺跡発掘調査団 1979
- 3) 高橋一夫「集落分析の一視点——入口と集落の道——」『埼玉考古』21 1983
- 4) 鬼高期研究グループ「房総における鬼高期の研究(研究編)」『日本考古学研究所集報』IV 1982
- 5) 八幡一郎・岡崎文喜・他『外原』船橋市教育委員会 1972
- 6) 柿沼修平・古内茂・他『京葉』千葉県都市公社 1973
- 7) 椛山林継・鈴木道之助・他『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書I』1974
- 8) 田村言行・高橋健一・他『岩富深谷津・太田宿』佐倉市教育委員会 1983
- 9) 調査研究員上守秀明と筆者が1983年度に調査を行なった。
- 10) 市原市文化財センター 浅利幸一氏の御教示による。
- 11) 谷島一馬・須田勉『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団 1979
- 12) 平野雅之『戸崎城山遺跡発掘調査報告書』君津郡市文化財センター 1984
平野雅之・小石誠「君津市戸崎城山遺跡出土の遺物について」『君津郡市文化財センター研究紀要』II 1984
- 13) 白石浩・榊原弘二『千葉市大道遺跡・生実城跡発掘調査報告書』千葉県文化財センター 1983
- 14) 高橋一夫「和泉・鬼高期の諸問題」『原始古代社会研究2』校倉書房 1975
- 15~17) 栗本佳弘『東関東自動車道(千葉——成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』東関東自動車道遺跡調査団 1971
- 18) 『本庄市史』資料編 本庄市 1976 他
- 19) 柿沼幹夫・小久保徹・他『下田・諏訪』埼玉県教育委員会 1979
- 20) 柿沼幹夫・小久保徹・他『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県教育委員会 1978
- 21) 『女堀遺跡群発掘調査概報』本庄市教育委員会 1979
- 22) 荒井幹夫・他『打越遺跡』富士見市教育委員会 1983 他
- 23) 釜口幸市・他『昭和47年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書(I)』横浜市埋蔵文化財調査委員会 1973 図上では記録されていないが、写真からはB-3号住の貯蔵穴脇に硬質ベッドが存在するように見える。またB-5号住のカマドが長い煙道部を持つ点は草刈E区の初期カマドに共通する。北武蔵、下総には殆ど見られない特徴であり、伝播経路を考える上で示唆的である。
- 24) 丹羽茂・他『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県教育委員会 1983
- 25) 所謂間仕切り溝が室内分割の痕跡であることはほぼ異論がないだろうが、その上部構造については未解決の問題である。なお、間仕切り溝とベッド状遺構が併存しないことに注意すべきだという石野博信の指摘がある。小稿ではベッド状遺構については触れないが、これはまた石野が述べているように寝所あるいは物置場としての機能は認められてよいと思われる。但し、これは床面周辺部を中央部から分割するものであり、間仕切り溝を持つ住居の方がより進んだ空間分割を持っていたと言えるのではないか。石野「考古学から見た古代日本の住居」大林太良編『家』社会思想社 1975
- 26) 貯蔵穴の機能も未だ解決されない問題である。貯蔵されていた物が遺存しないからである。さしあたって我々にできることは、特に火災住居における貯蔵穴内の遺物出土状況を分析することであろう。とりあえず小稿では貯蔵穴はあくまで「貯蔵穴」として扱う。
- 27) 駒見和夫「古代における炉とカマド——北武蔵での検討を中心として——」『信濃』36-4 1984
駒見はカマド出現以後炉が竪穴外に形成された土座部分へと移る、としているが、ネガティブな根拠しか示されておらず承服できない。
- 28) 柿沼幹夫「住居跡について」前掲『下田・諏訪』

- 29) 前掲註3文献
村田六郎太・他『千葉・上ノ台遺跡』 千葉市教育委員会 1982
- 30) 石毛直道『住居空間の人類学』 鹿島出版会 1971
- 31) 大林太良「住居の民俗学的研究」 大林編『家』 社会思想社 1975
- 32) 国分期に一般化する小型住居は「カマヤ」の分棟（石野 前掲）の真偽は別にしても、その中にあらゆる機能空間が存在したとするには狭

すぎる。当然竪穴外に住居空間が及んでいたと考えざるを得ない。土間空間の成立という柿沼らの視座はここにこそ生きてこよう。

また古墳時代にも一部に柱穴の検出されない小型住居が存在する。これらが特殊な機能を持った竪穴であったが故に小型なのか、竪穴外にも住居としての空間が広がっていたのかという問題がある。今後、竪穴の周辺にも目を向けた詳細な調査が望まれる。

（2班：千原台事務所）

近年の理論的動向

森本和男

1970年代後半から社会科学のいろいろな分野でマルクス・ルネッサンスともいうべきマルクスへの再帰現象が広範囲にまき起こってきた。時あたかも昨年はマルクス没後100周年にあたり、また今年にはエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』出版100周年でもある。これを記念するさまざまな行事が世界各地で開催され、記念図書が各国で出版された。今日、学問におけるパラダイム転換の声が世界のあちこちで聞かれるが、その際にマルクス主義が重要な指針の一つを占めることはほぼ確実であろう。19世紀の学問的伝統が20世紀末になっても生き続けるという現象は少々奇異な感を受ける。もちろん19世紀に引用された細部にわたる事実記載はとくに古ぼけてしまい、使いものにならない。それにもかかわらず19世紀の学問が提出した方法、分析、概念が今日でも議論の対照となり得ているのは、一つには100年前の人類の智慧から我々はあまり進歩していないのではないかという反省と、二つには20世紀になっても基本的には人間社会は決して良くなっていないのではないかという危惧によっている。

マルクスの考えた原始古代社会の姿は現在ではほとんど通用しない。その理由は、マルクスの拠った19世紀の人類学、歴史学の成果と今世紀の学問的到達点とがあまりにもかけはなれているからである。具体的に農業共同体論をすこしとりあげてみよう。マルクスの原始共同体観についての再検

討は、第2次世界大戦後の60年代に再開されたアジア的生産様式論争の延長として70年代初頭から経済学、人類学、歴史学の各分野で国際的にまき起こった現象である。その際にロシアの革命家B. H. ザスーリッチあてのマルクスの手紙草稿に登場する農業共同体の実態も粗上へのせられたのである。マルクスが革命前の帝政ロシアの社会に関心を与えたのはロシア資本主義の発展性とロシア革命の方向性を探るためであり、そのマルクスへ送ったザスーリッチの手紙もロシア資本主義成立の可否とロシアの共同体（ミール共同体）の運命を問うものであった¹⁾。

ザスーリッチあての手紙草稿にある農業共同体の概念を、マルクスはおもに古ゲルマン社会の研究とロシアのミール共同体の研究から導き出している。マルクスは古ゲルマン社会の研究をG. von マウラーにおもに依拠していた。また、古ゲルマン社会学説史上において2分される一般自由人学説と領主制説のうちマルクスは前者に属していた。ところで、最近の古ゲルマン社会の研究によると、マウラーの重要な論点であるマルク共同体説や土地割替説はくつがえされ、しかも、学界を支配する学説も現在では一般自由人学説よりも領主制説が有力になってきたのである。マルクスの古ゲルマン社会像を今日の研究レベルと比較してみるとあまりにもおおきくかけはなれている。同様のことがミール共同体の研究にもあてはまる。ロシア